

幼保小をつなぐ

# 架け橋プログラム

幼保小の接続をよりなめらかに ~架け橋プログラムの実践と展望~

啓林館主催 オンラインセミナー開催レポート



いつでもどこでも視聴できる!  
アーカイブ  
動画配信中  
※有料、2026年未まで配信

## 登壇者



福井大学教授  
岸野 麻衣 先生



品川区立台場幼稚園副園長  
親泊 絵里子 先生



横浜市立東本郷小学校校長  
堂腰 康博 先生



彦根市立城東小学校教諭  
中川 可奈 先生

2026年1月6日(火)、架け橋プログラムオンラインセミナーを開催しました。本セミナーでは、福井大学の岸野麻衣先生による基調講演に加え、3名のパネリストの先生方から、架け橋プログラムの実践事例を紹介していただきました。また、参加者から寄せられた質問にさまざまな立場から答えていただき、充実したセミナーとなりました。本リーフレットでは、セミナーの内容の一部を抜粋し、ご紹介します。

# 前半の部



基調講演

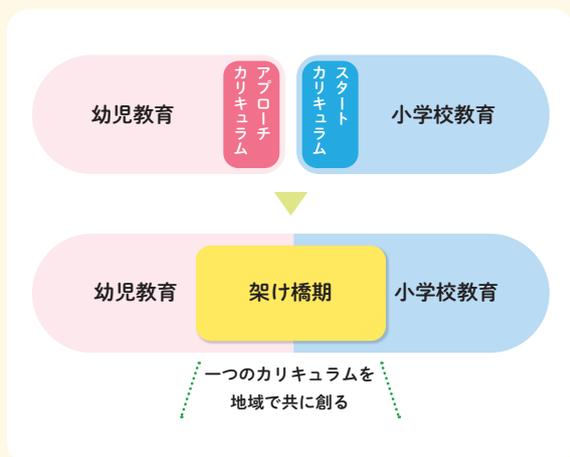
## なぜ今、 架け橋プログラムが必要なのか？

福井大学教授 岸野 麻衣先生

### そもそも架け橋プログラムとは

子どもの学びと育ちはつながっています。子どもたちは、0歳から環境と関わりながら成長していき、幼稚園・保育園・認定こども園等で学びの段階を迎え、やがて小学校1年生になり、2年生、3年生と続いていきます。こうした、子どもたちの学びと育ちが続いていく中の、5歳児から小学校1年生までの2年間を架け橋期とよびます。架け橋プログラムとは、この2年間の学びのつながりをじっくりと考えていこうというものです。

従来の教育では、幼児教育の終わりをアプローチカリキュラム、小学校教育の始まりをスタートカリキュラムとして、就学前後についてさまざまな取り組みが行われてきました。架け橋プログラムでは、それだけでなく、少なくとも年長の4月から小学校1年生の3月までを架け橋期として、幼保小がともに、学びの要になる時期の教育について考えていくことが求められています。



幼児教育ワーキンググループなどでは、幼児期で育みたい資質・能力を、具体的な姿として表現した「10の姿」があげられています。これを、私たち大人が目前の子ども一人ひとりを捉え、見直す視点として活用して、幼保小でともに考えてみるのが、そのまま架け橋期のカリキュラムにつながっていくと思います。

### 何から始める？ 架け橋プログラム

架け橋プログラムには、多様な組織が絡む難しさがありますよね。なかなか足並みが揃わない状況においては、今ある枠組みでできること、今ある場を少しだけ変えていくことがよいのではないかと思います。



例えば、まずは園同士だけ、1校区だけなど、小さなところから進め、具体的にどうするか手がかりを示し、「やってみよう」という考えを広めていくのがよいのではないのでしょうか。

子どもの姿を真ん中に語り合い、お互いを問い直していくことが実践の見直しや改善につながっていくと思います。組織ごとに、異なる文化やアイデンティティに根差した経験や思考があります。それらを合わせ、協働し、新たな価値をつくり出していき、より良い未来へつながるよう、私たち自身が探究していくことが大切なのではないのでしょうか。



# 後半の部



## 実践事例①

### 継続による“実感”を手応えに

～施設の特徴を生かした「架橋研」の取り組み～

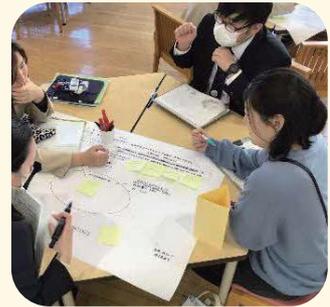
品川区立台場幼稚園副園長 親泊 絵里子先生

本園は、品川区立台場小学校と同じ建物にあり、幼小の職員室が同室です。施設の強みを生かし、幼小の子ども同士や教職員が交流しやすい環境を整備しています。

さらに実践的な接続を目指し、幼保小協働の仕組みとして、接続に特化した研究会である「架橋研」を立ち上げました。共通の視点をもって保育・授業の参観を行い、具体的な子どもの姿から、幼保小合同協議によって気づきや学びを共有します。

小学校の先生の教科の見方・考え方など専門性に触れることで、幼児の姿の捉え方や見方の傾向に気づいて、

情緒的な面に留まらず幼児がどんなことに気づいたり、考えたりしているかなど思考の状況を読み取り、その芽や力を伸ばしていく必要性に気づきました。幼児期に育みたい3つの資質・能力をバランスよく育む意識につなげ、指導の改善・工夫を図っています。



## 実践事例②

### 子どもが自然体でいられ、自分らしく伸びていける学校をつくる

横浜市立東本郷小学校校長 堂腰 康博先生

子ども一人ひとりが生活のつくり手となること、そして、架け橋期の考え方でそのつくり手を育てることが大事なのではないかと思えます。

本校では、5つの視点で仕組みをつくっています。学校だけでなく、横浜市としての取り組みを全教職員で理解すること、幼保小の合同研修で共通事項を整理すること、1年生の「遊びの中の学び」を理解すること、教科横断的な視点で、教育課程・実践を工夫すること、学び

や環境構成を可視化することです。

具体的な取り組みとして、幼保小で年3回集まる機会を設けています。本校は、30ほどの施設・園から子どもを受け入れているため、すべての園と平等に交流するのが難しいのですが、こうして集まる機会を設けることで、園での「自発的な活動としての遊び」が、どのような学びにつながっているのか、対話を通して気づきを深めています。

## 架け橋 プログラム Q&A

### Q. 相互の「連携」を推進するには、どうすればよいでしょうか？

A. 幼保小の連携を推進していくには、架けた橋を行ったり来たりすることが大切です。幼保小で協働して橋を架けた後、一方通行にならないように継続して協議していくことが望ましいです。話し合いを続けていくことで、園での子どもの自発的な遊びが、小学校での学びの実践につながっていきます。

互いの教育方法を尊重し、学び合って改善し続けることが、相互連携の推進につながっていくのではないのでしょうか。





### 実践事例③

## 彦根市立城東小学校における 1年生の取り組みと全校での取り組み

彦根市立城東小学校教諭 中川 可奈先生

子どもの姿や思いに目を向けて、「安心、のびのび」「先生、できるよ!」「〇〇したいな!」の3ステップを意識し、1年生の指導に取り組みました。登校後すぐの時間に遊びの時間を設けたり、学校で直面する困りごとに対して、園での子どもの経験を引き出して実践したりしました。また、**子どものもつ困り感を単元の導入に結びつけ、子どもたちが自信をもって取り組めるように工夫**しました。

園の先生と交流することで、園では子どもの今だけでなく、その子の過程を捉えているという視点の違いや、実は共通の課題を抱えていることなどを知ることができました。これらを踏まえ、どの学年でも思いや願いのつ

ながりを意識した学びのサイクルデザインシートを作成し、全校で授業改善に取り組んでいます。架け橋の考えをもつことで、私自身も楽しんで、子どものさまざまな姿を発見することができました。



### セミナーアーカイブ配信のご案内

本セミナー全体をご覧になりたい方は、ぜひアーカイブ配信をご視聴ください。詳しい実践事例や、架け橋プログラムの意義、幼保小の連携・接続に関する質問への回答など、セミナーレポートには書ききれなかったさまざまなお話を配信しています。

※視聴可能期間：ご購入日～2026年12月31日



アーカイブ視聴権  
ご購入はコチラ※  
(Peatix)



### 架け橋プログラムハンドブックのご案内

幼保小をつなぐ「架け橋プログラム」が動き始めています。その意義やその方法、幼児教育と小学校教育のつながりについて、分かりやすくまとめ、授業支援・サポート資料(教授用資料)として無料で公開しています。



PDFの  
ダウンロードは  
コチラ  
(啓林館公式)

●イラスト/のいぶらこ

●レイアウト/山本千亜紀

●企画・構成・編集/(株)新興出版社啓林館 編集部

知が啓く。  
**啓林館**  
<https://www.shinko-keirin.co.jp/>

本社 〒543-0052  
東京支社 〒113-0023  
北海道支社 〒060-0062  
東海支社 〒460-0002  
広島支社 〒732-0052  
九州支社 〒810-0022

大阪市天王寺区大道4丁目3番25号  
東京都文京区向丘2丁目3番10号  
札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階  
名古屋市中区丸の内1丁目15番20号ie丸の内ビルディング1階  
広島市東区光町1丁目10番19号日本生命広島光町ビル6階  
福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階

電話 (06)6779-1531  
電話 (03)3814-2151  
電話 (011)271-2022  
電話 (052)231-0125  
電話 (082)261-7246  
電話 (092)725-6677